



漢詩を味わう

第94回

半山春晚即事 王安石

春風取花去 春風 花を取りて去り

酬我以清陰 我れに酬ゆるに 清陰を以つてす

翳翳陂路静 翳翳として 陂路静かに

交交園屋深 交交として 園屋深し

牀敷每小息 牀敷には毎に小しく息い

杖屨或幽尋 杖屨もて或るいは幽尋す

惟有北山鳥 惟だ 北山の鳥の

經過遺好声音 經過して 好声音を遺す有り

春風は美しい花を無情にも奪い去つたが、その代わりとして私にくれたのは清らかな木陰。小川のみもとの路は日陰で薄暗く、いかにも静かなおもむき。木々の枝が重なり合つて庭のはなれはしんとしている。牀几や敷物をあちこちに置いて、いつもしばし木陰で一息いれるのだが、時には杖をつき、くつを履いて静けさを求めて尋ね歩くのも楽しみだ。ほかにただあるものは、北山の鳥が、飛び過ぎたあとにうつくしい囀りの音をのこしていつてくれることは有難い。

《即事》「折に触れて。」目のまえに見える事がそのまま詩にしたもの。

《春風》春晚に作る本もある。

《翳翳》かげって明らかでないさま。

《陂路》堤防の路。坂道と解釈する本もある。

《交交》木がいつぱい生い茂っているさま。

《牀敷》牀几と敷物。

《杖屨》つえとくつ。

《幽尋》ひっそりとしたところを尋ね歩くこと。

王安石は北宋の朝廷で宰相として活躍した政治家です。「新法」と呼ばれる急進的な政治改革を敢行し、旧法党の蘇軾や黄庭堅とは政敵で、二人の生涯に大きく影響を与えた人物です。一方で詩人としては蘇軾や歐陽修からも高く評価され、特に絶句では北宋第一と称賛され、さらに散文家としても著名で、唐宋八大家の一人に数えられています。

半山とは、金陵（現在の南京市）の東北郊外にある玄武湖の東に聳える山と南京市街のちょうど中間のところ、王安石は晩年、ひとり息子の夭折を機に、ここに庵をもうけ隠棲しました。王安石は王半山と号しましたが、これに由来しています。

半山に隠棲してから作られた詩の多くは「閑適」に分類されるもので、若いころとは違って史実を批判した詩や政治的な風論詩は少なくなります。

この詩のように自然を賛美し、心を美の世界に遊ばせるかのような詩が多くなります。しかし隠棲後も、宰相という立場だった政治の世界で理想通りに行かなかつたばかりに、労働の苦しみを与えた民衆への思いやりは忘れていません。本誌5頁に掲載した大島崑山先生が書かれた王安石詩「独帰」は、その典型的な詩で、政界を引退し鍾山への帰途、目にした農民の労働の様子をうたっています。「疲農……」の一節は心に響きます。

王安石は用語に典故を巧みに取り入れて、先人の詩句のイメージを受け継いで変化させて詩を作ることを最も得意とし、やがて「江西詩派（黄庭堅の流れを汲む流派）」の特色となつて「換骨奪胎法」と名付けられます。最晩年には、半山の庵を仏寺として寄進するほど仏教思想に傾倒しました。そして前回本欄で紹介した寒山にいち早く目をむけ「寒山捨得に擬す」と題した換骨奪胎法を用いた詩を作っています。

参考文献：中国詩人選集「王安石」（岩波書店）漢詩体系「宋詩選」（集英社）漢詩の辞典（大修館書店）

春風花を取りて去り 我れに酬ゆるに清陰を以つてす 翳翳とし 陂路静かに 交交として園屋深し 牀敷には毎に小しく息い
杖履もて或るいは幽尋す 惟だ北山の鳥の経過して 好音を遺す有り

春風取花去酬 我以清陰翳陂路
静交園屋深牀敷每小息杖履或
幽尋惟有北山鳥経過遺好音

《大意》 一頁をご覧ください。(王安石・半山春晚即事)

山花客を迎えて笑い 谷鳥人を避けて啼く

山花迎客笑
谷鳥避人啼

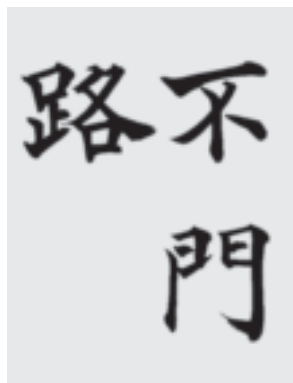
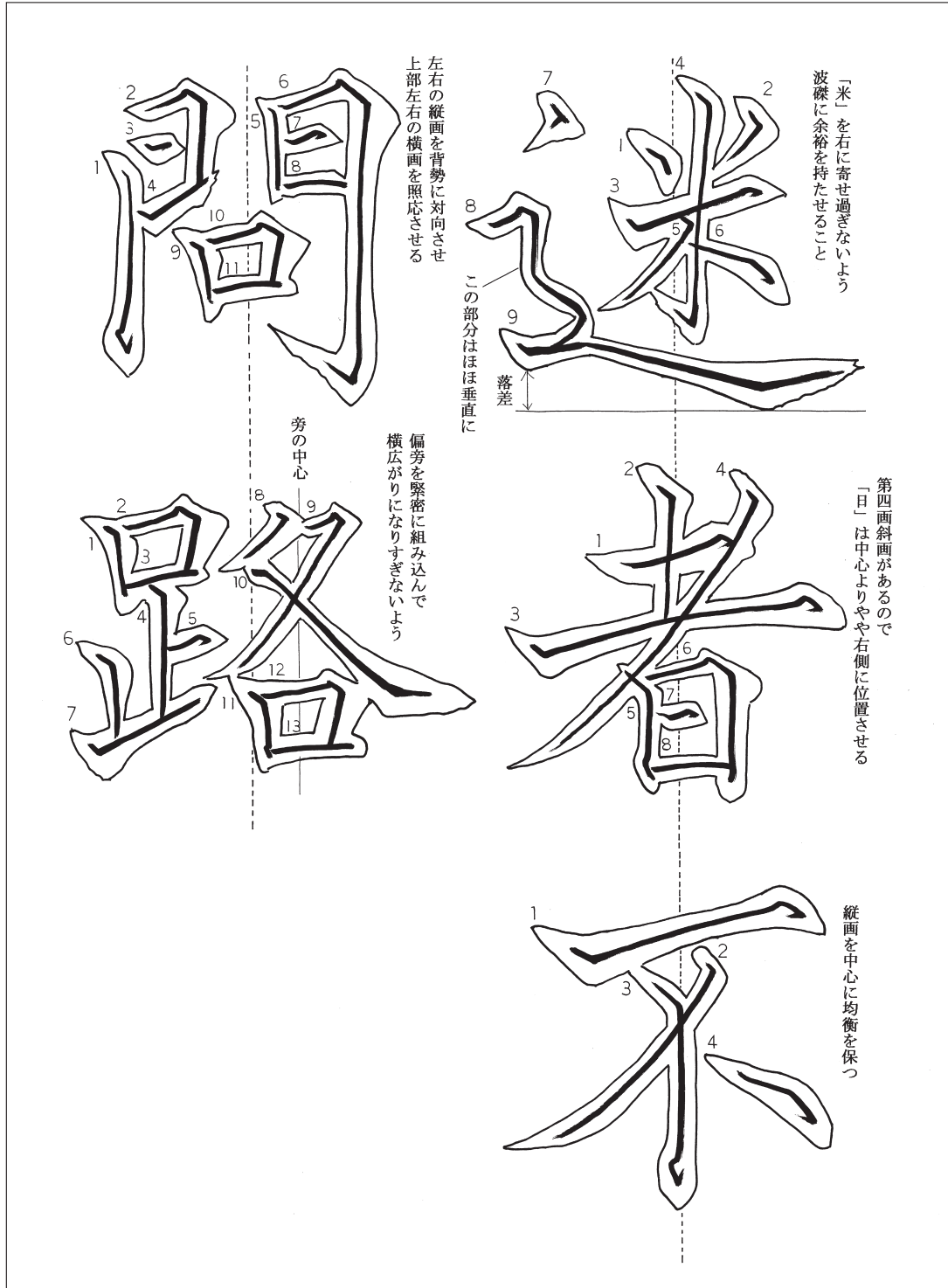
山花迎客笑
鳥避人啼

《大意》 山中の花は笑顔で客を迎えるように美しく咲き、谷間の鳥は姿を隠してさえずる (盧之翰詩句) ※「咲」は「笑」の古字

読み 迷う者は路を問わず (独善に陥ること・荀子)

迷者不問路

佐藤象雲書



- ・一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
- ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
- ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

迷者不問路

迷者不問路

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

次号課題

隸書

為善荷天祿

迷者不問路

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

善を為せば天祿を荷^にう

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部	順位	氏名
<p>瓶にさす藤の花ぶさみどかければ</p>		
<p>墨の上にとどかざうけり</p>		

正岡 子規

和泉 溪石 先生書



佐藤 象雲 書

音

センリユウフソク
エンチヨウシユエイ

略解

忠孝は川が流れるように怠らず
淵の水が澄めば影が映るように飾ることなく真心を



咸^みな願樂する所に因る。

史^し晨^{しん}後^{こう}碑^ひ

(後漢・西暦一六九年)の臨書 (23)

象雲臨



『因咸所願樂』

この史晨碑や禮器碑(一五六)・曹全碑(一八五)などに代表される後漢の八分隸は、三国時代となって、魏の曹操が立碑の禁(二〇五)を実施したことにより終焉を迎えます。続く西晋の武帝も墓碑や顕彰碑など一切の石碑の建立をすべて禁止(二七八)したことにより、木簡、古隸、八分隸と変遷しながら書美を競った隸書黄金時代は完全に幕を閉じることとなります。その後隸書などの石刻文字に代わって、紙の使用が普及したこともあり楷書・行書が書の主流となり、愈々書聖王羲之が登場します。

さて史晨碑は前碑、後碑とほぼ八年にわたって勉強してきましたが、後碑も終盤の部分となり、今月で終了ということに致します。漢隸の黄金期の逸品と言われ、言わば八分隸の王道ともいえる「史晨碑」を今後もぜひ継続して臨書して頂きたいと思えます。七月からは同じ代表的な八分隸である「禮器碑」を勉強していきたいと思えます。



すで
ちに陳迹と為るも

■王羲之・蘭亭序（東晋三五三年頃）の臨書（25）

象雲臨

『以為陳迹』

蘭亭序は全二十八行、三二四字で構成されていますが、その内容は前段と後段に分かれます。前段は会稽山陰の蘭亭で催された流觴曲水の宴の様子を具体的に述べていて、後半は人の感情や感慨といった内面的なものが時の流れに従って変化移ろうという哲学的な王羲之の想いを吐露している内容となっています。王羲之は「世説新語」や「晋書」などによると、東晋初頭の激動の時代に軍人としての大志を抱き、骨気の強い武人肌の人間だったようですが、一方でのちに書聖と冠されるほどの書の達人でもあり、文人としても優れた人物でした。武人でありながら「貞観の治」と呼ばれる文化政策による善政を施した唐の太宗に尊敬されることも理解できます。

今月は「以に陳迹と為（以前の喜びはみるみるうちに過去の跡となってしまふ）」という文言を臨書します。